今昔物語 第15話

川浚えと堰

かつて井路が網の目のように巡らされ、田舟の行き交う水郷地帯であった大東では、5月になると1カ月後の田植えを前に各村々では、用水確保のため農民総出で各河川、井路の掃除を行い、水の流れをよくしました。

6月1日になると寝屋川の鴻池堰（水門）が閉じられ、寝屋川の水位が上昇し、井路の水位も高くなり、田に水が入ります。すると、鮒や鯰、どじょうが畝の溝に入り、人が通ると波を立て逃げ泳ぐようすを見て、子ども達は喜んで遊んでいました。

しかし、農家では田に水が入る前に、冬作の麦・豆・じゃが芋などを収穫しなければいけないので、大阪市内で下肥を汲み、搬入する舟から、田へ施肥するための下肥を5月中に購入し備蓄しておかなければならないのです。とにかく堰が閉じられるまでに農作業を終えようと一家総出で、この時期は朝早くから夕方遅くまで働きました。

こんな農家の忙しさをよそに、5月早々、野崎観音の縁日には、菜の花が咲く街道を参詣者が次々と通い、連日観音さんの鐘の音が一日中響いていました。

今昔物語 第16話

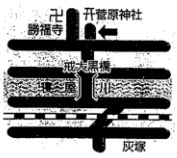
道端にたたずむ石造物

市のあちこちにある石造物は銘のないもの、数行あるいは膨大な文字がぎっしりとつまった石碑もあります。

その一つひとつが何かを意味し、また、現在に生きるわたしたちに何かを語りかけてくれます。道端にたたずみ、風雨にさらされているお地蔵さん、手入れのよくいき届いた場所に立つ石碑、道標、石仏など様々です。いずれもわたしたち祖先が残してくれた歴史的遺産です。

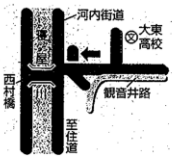
○諸福二丁目路傍の道標

古堤街道と灰塚を通り河内方面に向かう街道の分岐点に立っています。古堤街道は、大阪市内より寝屋川に沿い本市域に入り、諸福から太子田・赤井・御供田・中垣内・龍間を経て田原、さらに郡山に至る古道です。（現在生駒山中で部分的に途切れている）



○野崎観音道の道標

野崎観音道は、寝屋川筋・河内街道から分岐し、東へ観音井路（谷田川）沿いに専応寺、野崎観音に通じています。なお、ここから野崎観音までは約1・5キロです。



また、この道標の立つ寝屋川両岸は、往時寝屋川水運の浜でした。そのため、大阪市内からここまで舟できて、ここから野崎観音に徒歩で参拝する人も多かったと言われています。

●道標の「すぐ」とは、まっすぐという意味